

## 巻頭言 「一般ユーザーの意識変革を目指せ」

岐阜大学総合情報処理センター長 谷 和男\*

平成 14 年 4 月に総合情報処理センター長を仰せつかり、もはや 5 ヶ月が経った。センター長に就任するまでは、一般の工学系教官として、計算機やネットワークを使っていた。日本人の多くが中流意識をもっているのと同様に、自分の利用技術は普通のレベルかなとなんとなく考えていた。そして別に不都合もなく過ぎてきた。

センターに来るとき、自分には分からないことが多くあるだろうなと思っていたが、予想以上に分からないことだらけでびっくりした。ネットワークについて意味の分からない略語が飛び交っている。今でもまだ分からないことが大部分である。それで、分からないことを云々してもしようがないので、アナロジーで、ネットワークの利用を自動車の運転に比較して考えてみる。ネットワークに入ることは、公道で車を運転することに相当するであろう。

自動車のドライバーは試験に合格して免許を持っているが、自動車について何でも知っているわけではない。もちろん、バスの運転手やプロのレーサーは高度なことを知っているに違いない。しかしだれもが高度な知識をもたなければならないというわけでもない。一方、全体としてみると、交通事故はかなりの割合で発生しているが、それにもかかわらず、自動車交通方式は社会に容認されているとよいであろう。交通状況を容認レベルにまで保つために極めて多くの努力がなされている。まず、ドライバーは、次のことを要求されている。(1)最低限の運転技術、(2)最低限の車両に関する知識、(3)交通規則の遵守、(4)車両の整備・点検、(5)事故に対する用意(保険など)。また、交通管理者側もいろいろな対策を実施している。(1)道路整備、(2)信号・標識の整備、(3)交通管理、(4)免許管理、(5)車検、(6)法規の整備、(7)教育・教習、等々。

私が始めて免許を取ったのは 1966 年で、やっと名神高速道路ができたくらいのときである。この 36 年間に、交通事情も変わり、ドライバーの意識がずいぶん変わってきている。(たとえば、つくばでの飲酒運転はこの数年でぐっと減った。)このような意識の変化は、次の 3 つの要因で起きていると考える。(1)交通状況の変化をドライバー自身が認識する。(2)免許更新時の教習やテレビなどを通じた教育によって、意識を変える。(3)法的強制で、罰則や免許停止を含む不利益をドライバーに与える仕組みを設ける。(1)、(2)は性善説に立っているが、(3)は性悪説に立っている。残念ながら性悪説に基づいた方法が一番有効であると言うしかない。

重要なことは、自動車交通が社会に容認されるために極めて多くの努力がなされており、ドライバーにとっては多くの制限・義務・責任が課せられていることである。さらに重要なことは、ドライバーがこれらの責務を課せられるのもしようがないなと意識していることである。知識にもまして意識が重要である。

一方、現状の情報ネットワークシステムを振り返ってみると、すでに古きよき時代を終えて、いまいろいろ問題が生じている。それらは自動車交通における何かの問題に比喩されるであろう。ドライバーは一般ユーザー、交通管理者は、大学では情報処理センターを含む大学情報管理部門に相当するであろう。そして、一般ユーザーの意識は、ドライバーの意識に比べて、相当低いレベルにあるといわざるを得ない。その理由は、ネットワークシステムが急速に発展したので意識が追いつかないということもあろうが、特に意識を高めるための管理体制が十分に立ち上がっていないことによるといえよう。

早急に必要なのは次のことである。(1)ユーザーに対する教育、(2)システム整備、(3)規則の整備とその施行。そして残念ながら、性悪説に基づいた(3)の手法が最も効果的であると予想される。学内における車規制が容認されているわけであるから、ネットワークに対しても大学指導者側が決意を持って望めば、意識変革は成し遂げられると思う。セキュリティポリシーの確立はその第一歩であると言えよう。

自分自身の低い意識を高めるためにもなると思って、このようなお話をした次第である。